

影向石

下段の庭で目立つ岩は影向石である。この石が重要であることは、注連縄がかけられていることからわかる。日本古来の宗教である神道では、ある物が神聖であることを示すために注連縄をかける。影向石も例外ではない。伝説によると、約 700 年前に夢窓国師が西芳寺を再興した際に、体の大きさと勤勉さ、力の強さで目立っていた助手の一人が、普通であれば何人もが力を合わせなければ動かせないような石をたった一人で運んでいた。誰も彼が誰なのか、どこからやってきたのかも知らなかったが、庭園が完成すると、この男とは自分の持ち物と国師のストールと交換してほしいと申し出た。国師はこれに応じたが、この男の正体を知りたいと思い、そのあとをつけ、京都の中心部にある染殿院にまでやってきた。その寺の中で、国師は自分のストールが地蔵の像にまかれているのを見つけた。地蔵は仏教の神であり、衆生の、特に子供や妊婦、旅行者の守護者である。伝説では、実際、夢窓国師の庭園建設を手伝っていたのは地蔵である、と結論づけている。影向石はこの伝説と関連がある。